

大学図書館への期待

岩 猿 敏 生

いわさる・としお

日本図書館学会会長

一九一九年福岡県生まれ

近頃のように、大学改革の問題が大学関係者の間だけでなく、世間一般でも広く論じられるようになったのは、珍しいことではなからうか。大学改革が論じられることじたい、大いに結構なことである。しかし、大学改革というとき、話題はもっぱら大学の教育と研究に集中する。大学の目的からして、そのことじたい当然であるが、大学の教育と研究に密接にかかわる大学図書館の問題が、改革論議の中で台風の眼のようにいつもすつぽりと抜け落ちていっているはどうしたことだろう。

近頃はまた大学史研究という新しい分野が開拓され、海外の大学史研究の優れた成果もあいついで紹介されているが、内外の大学史研究においても、大学図書館は大学史じたいとは無縁でもあるかのように、ほとんど言及されない。大学図書館史は大学史じたいよりも、より広い図書館史の一部であり、図書館学の領域に属するものと考えて、大学史

研究者が自分たちの研究領域に含めて言及することを避けているのか、あるいは大学図書館史研究は大学史研究の主流からそれた小さな支流として無視しているのかのいずれかであろう。大学図書館史が大学史研究の主流でないことは明らかであるが、大学図書館史は地震計のように、大学史じたいの変動をいつも敏感に示すのである。

大学はヨーロッパ中世末にいつとはなしに成立している、常に高等教育機関としてあり続けてきた。しかし、大学じたいが研究機関としての機能を制度化するのは、十八世紀半ばの啓蒙主義大学の成立くらいである。そのパイオニアになったのが、ドイツのゲッチンゲン大学であった。

大学が研究機関としての機能を果たすようになるとともに、大学図書館に研究図書館としての役割が始めてつけ加わる。それまで、大学が教育機関として終始してきたとき、図書館も学生の教育に直接結びついた学習図書館としての機

能を果たしてきたかと言うと、そうではなかった。それは、大学の教育がテキストと講義という教育方法をとっていたため、大学教育に図書館が結びつく余地はなかった。したがって、大学には図書館が設けられるのが普通であったが、大学図書館を持たない大学もあった。啓蒙主義大学の成立以前は、大学図書館は大学の研究だけでなく教育とも直接の結びつきを持たず、大学のたんなる飾りとしてしかみられていなかった。そのため、大学図書館は収書のための経費も持たず、蔵書は偶然的な寄贈に頼った。

啓蒙主義大学では教育もゼミナー方式が採用されるようになり、教育面においても大学図書館が直接かかわりを持つようになる。今日の大学図書館の持つ研究図書館及び学習図書館としての機能は、大学じたいの研究及び教育機能の成立に対応するものである。

十九世紀後半のアメリカでは、地域の産業開発のため州立大学が設置され始める。ヨーロッパでは地域の産業開発と結びつく農学や工学といった実学は、伝統的な大学の学問としてはなかなか受け入れられなかったが、アメリカに始まる地域サービスという大学の新しい理念は、今日ようやく広く受け入れられ、教育・研究とならぶ大学の第三の機能として定着し始めている。

帝国大学からスタートした日本の大学制度は、富国強兵という国家目的のための研究機関であるとともに、近代的高等教育機関としてよりも、支配層エリートの選抜機構としての役割が強かったため、教育方法もテキストと講義中心方式が戦後まで続いた。また、帝国大学的な中央志向を日本の大学は強く持ち続けたため、地域との結びつきは最近まで考慮されなかった。

それに、戦後の日本の大学を長い間支配してきた左翼イデオロギーは、産学協同を眼の敵にしたため、大学と地域との結びつきは困難であった。しかし、日本の大学もようやく左翼イデオロギーの呪縛を脱して、アメリカの大学に始まる地域への貢献が定着してきた。それとともに、大学図書館の地域公開が大学図書館の新しい機能になってくる。日本の大学図書館も地域への公開を、戦前から全く意図していなかったわけではない。しかし、大学じたいが象牙の塔に閉じこもっている限り、図書館だけが地域に開放されることは困難であった。それで、大学図書館は大学の教育・研究にサービスしてなお余力ある限り、恩恵的に地域に開放するという姿勢が今日までなお尾を引いている。

*

大学の機能の展開に応じて大学図書館もその機能を発展

させたが、大学図書館を含めて図書館じたいが今日大きな変革の渦中にある。それは、今日までの図書館がその上に成立していた紙メディアに代わって、新しく電子メディアが登場してきたことである。このことは、十五世紀半ばグーテンベルクの活字印刷術の発明によつて引き起こされた写本から刊本への移行をはるかに越える変化を、図書館に与えるものと予想される。

一般に紙メディアの持つ短所としては、第一に、利用者は空間的に紙メディアと同一の場所にいななければならない。第二に、紙メディアは複数の人が同時に利用できない。第三に、紙メディアの保管は大きなスペースを必要とする。今日世界の大規模大学図書館にとつては、年々増加する蔵書のスペースをいかに確保するかは頭を悩ます深刻な問題である。

これに対して、今やわれわれの前に現れてきた電子メディアは、紙メディアの持つ制約から自由である。電子メディアの利用にあたっては、通信回線で接続できれば空間的制約を受けない。必要な資料が手許にある必要はないから利用者は紙メディア利用の場合のように、わざわざ図書館まで足を運ぶ必要もなくなる。また、同時に複数の人が同一の電子メディアを利用することもできる。保管にあつ

ても紙メディアが必要とするような膨大なスペースを必要としない。

電子メディアの出現が図書館の未来にバラ色の夢を開いてくれそうに思われた十数年ほど前から、図書館界の一部では二十一世紀の図書館は電子メディア中心になっていき、これまでの図書館は紙メディアを保存する博物館的なものになり、情報の利用は電子メディアのセンターにとつて代られるであろうという大胆な図書館衰退論さえ現れた。

写本から刊本の時代に完全に移行したように、こんども紙メディアから電子メディアに完全に移行するであろうか。私には完全な移行ではなく、二つのメディアの併存の時代に入っていくと考えられる。写本から刊本への移行がスムーズに進みえたのは、写本の量的な少なさが一因であつたと思われる。写本時代ヨーロッパの図書館の蔵書数は三けた台が普通であつた。それに較べるとき、今日の刊本の数はすべてが電子メディアにとつて代わられるには余りにも大量である。

それに、近代文学のように紙メディアと結びついて発展したものもある。電子メディア論者の中には、二十一世紀以降紙メディアが姿を消すとき、文学もまた生き残れないと予想する者もいる。その予想の当否はともかくとして、

文学作品を鑑賞の対象として読もうとするとき、電子メディアを利用して読もうとする人は少ないであろう。これからも、文学作品や一定の既知の情報を手際よくまとめた教科書のようなものは、図書という手軽で便利な紙メディアと切り離せない。

さきに大学図書館の機能として研究と学習へのサービスを挙げたが、この両機能の相違に依拠して、利用されるメディアも異なってくる。研究図書館では今後電子メディアへの依存がますます大きくなるであろう。一方、学生の学習上の要求に依る学習図書館では教科書や、学生の教養に資する文学作品、学術上の古典を中心として従来の紙メディアが依然として中心となる。もちろん、それは学生を電子メディアへのアクセスから閉め出すのではない。電子メディアへのアクセス及びそれに必要なスキルの訓練は、図書館及び大学教育の中にはつきり位置づけることが必要である。

大学図書館の第三の機能としてつけ加わってきた地域への公開については、地域住民の情報要求を考慮して、大学図書館の公共図書館化を説く考え方があつた。しかし、地域住民の情報要求に直接応ずるのは地域の公共図書館である。大学図書館の地域公開が意味を持ちうるのは、大学図書館

が公共図書館化するのではなく、公共図書館の守備範囲を越えた研究資料及び情報を提供しうる研究図書館としての大学図書館である。

大学じたいの改革とともにメディアの変化という二重の変革の渦中に今日大学図書館は置かれている。それに対応した図書館活動を具体的に展開するのは大学図書館員である。図書館が資料、施設といったハード面にかに経費を投じて、ハード面を有効に働かせうる図書館員というソフトが加わらなければ、しかも優れた図書館員がいなければ、図書館はその働きを展開しえない。図書館のハード面は人目につき易いが、人というソフト面は目につきにくい。ため、これまで兎角なおざりにされてきた。これでは仏作って魂入れずである。

わが国の大学図書館はハード面ではすでに国際的にも十分比肩しうるレベルにあるが、図書館員というソフトの面では量、質ともに国際的レベルに及ばない。二十一世紀に向けて大学図書館が大きな変革の渦中にあつて、その発展の方向を見誤らずに進んでいくためには、大学図書館員の教育システムの確立を始め、量、質両面における人の問題の改善が、早急にはかられることを期待しなければならぬ。